

書評・紹介

浪花宣明著

『在家仏教の研究』

片山 一良

I

待望久しい本格的な在家仏教研究書の登場である。公刊以来すでに一年が経過しようとしており、その書評紹介となると今日の我国では聊か遅きに失した感もあるが、時の流れに耐えるものならば、これを毫も躊躇することはないと考える。

著者浪花氏は、大谷大学において佐々木現順博士(本書序言)指導の下にアビダルマを研究し、大学院終了後インドのブーナ大学に留学、一昨年 Ph. D. の学位を取得された新進気鋭の学者である。インドでは M. G. Dhadhphale、J. R. Joshi、両博士に師事、かつ斯界の碩学 P. V. Bapat 博士にも教えを乞いつつ、Abhidhammathavibhavi の原典校訂を行なう、これを学位論文 A Study in the Psychology of the Pali Abhidhamma にまとめられた。しかもこの論文作成のかたわら、すでに日本で試訳を終えていたという Urasakajananakara (U) の研究に手を染め、その成果を帰国後「U の研究」と題し、大谷派擬請論文として提出された。かくして現われたもの

が本書である。

ここにいう U とは、伝統仏教における在家者のための最も包括的な綱要書とされ、十二世紀セイロンの Ananda 長老によってパーリ語で著わされたものである。そのローマ字本原典は、一九六五年ロンドンのパーリ語聖典協会(PTS)から H. Saddhatisa 師によって校訂出版された。書評は早々と現 PTS 会長の K. R. Norman 氏("A Review on U", JRAS, Part 3/4, 1966) によって、また我国では校部建博士『仏教学セミナー』第四号、一九六九年)によってなされたが、とくに後者は浪花氏に U の研究を促したと言われる。

著者はこれまで南北両伝のアビダルマ研究に、とりわけ重要な基本的概念である行、心、心所法などの分析研究に精力を注ぎ、次々と成果を論文に発表しておられるが、その論旨の明快、具体的なること、方法論の慎重なることはすでに定評もあり、この領域で独り際立っているように思われる。パーリ語文献中、教理学的に特異な位置を占める U の読解と平明な和訳が、かかる最適の人を得て逸早く試みられ、かつまた堂々たる論考を加え、我国最初の「在家仏教の研究」として提示されたことは、斯学界の無上の欣快とするところである。本成果に対し満腔の敬意と祝意を表したい。

II

本書は全体が二部に分かれ、第一部は研究篇第六章一六二頁、第二部は和訳篇九章二六七頁から成る。内容紹介の偏りを避け

るために、まずはその全体を目次によって示すことにしたい。

〔第一部研究篇〕

序説

第一章、在家実践道の構造

第一節、在家解脱論（問題の所在、原始經典の在家解脱論、

パーリ上座部の在家解脱論、大乘仏教の空の実践）

第二節、U₁pasakajanaṅkara の在家実践道（U₁の構成、

人倫の確立と宗教的実践、世間道から出世間道へ、U₁の在家解脱論）

第二章、三帰依

第一節、「帰依経」の因縁物語について

第二節、仏・法・僧

第三節、帰依と信

第四節、羯磨（三帰依）の順番

第五節、能帰依（世間の帰依、出世間の帰依）

第六節、帰依の汚れと破壊（帰依の汚れ、帰依の破壊、帰依の果）

第三章、戒と頭陀支

第一節、常戒（戒の語義 sanadhāna と upādhāna、五戒と十戒、五戒の受け方、戒体について、五戒の仏教的意義）

第二節、布薩戒（布薩戒の内容、布薩の目的、布薩日、布薩日の修行）

第三節、戒の破壊と汚れ（戒の破壊、戒の汚れと浄化）

第四節、頭陀支（頭陀支の語義と本質、在家者の頭陀支、

頭陀支の仮実をめぐる論争）

第四章、正しい生活

第一節、人倫の基本と避けるべき職業

第二節、正しい生活（四種の業煩惱、悪業の四つの原因、

財産を失う六つの原因、四種の悪友、四種の善友、六つの方角の防護、財産の活用と蓄積、婦人への教誡、生活の汚れとその浄化）

第三節、怖畏について（怖畏の種類、怖畏のはたらき、怖畏の主体、怖畏を越える方法）

第五章、十福業事と障礙法

第一節、パーリ上座部の十福業事説（アビダルマにおける

福業の位置、十福業事説と十二福業事説）

第二節、布施（正しい布施の仕方、U₂の布施説の特色）

第三節、修習

第四節、恭敬と作務

第五節、功德の施与と功德の随喜（功德の施与、功德の随喜）

第六節、聞法と説法（聞法、説法）

第七節、見正業

第八節、障礙法の説明（聖者の誹謗、五無間業）

第六章、無我説と福果の完成

〔第二部和訳篇〕

凡例、本文『在家信者の人の莊嚴』（U₂pasakajanaṅkara）

- 第一章、帰戒の説明 (Saraṇasīla-niddesa)
- 第二章、戒の説明 (Sīla-niddesa)
- 第三章、頭陀支の説明 (Dhutaṅga-niddesa)
- 第四章、正しい生活の説明 (Ājīva-niddesa)
- 第五章、十福業事の説明 (Dasapuññakīryavattu-niddesa)
- 第六章、障礙法の説明 (Antarīyakadhama-niddesa)
- 第七章、世間の幸福の説明 (Lokiyasampatti-niddesa)
- 第八章、出世間の幸福の説明 (Lokuttarasampatti-niddesa)
- 第九章、福果の完成の説明 (Puññaphalasādhaka-niddesa)

まず「第一部」第一章は、本書研究の根幹をなし、パーリ仏教全体の在家解脱論——在家者が解脱・涅槃に到達できるか否か——を総括している。その前半では、とくに藤田宏達博士の「在家阿羅漢論」(『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』)に依りつつ、原始仏教においては本来の立場からすれば在家者も解脱・涅槃に到達しうるが、その修行法は明確にされていないとする。これに対してパーリ上座部では、例えば『ミリンダ王問経』によると在家者は阿羅漢性に達しうるが特相が微力であるためそれを保ちえず、即日に出家するか般涅槃するかしかなないとするから、結局は阿羅漢は実在せず、ただ可能性のみあるだけで、しかもその修行法は原始仏教の場合と同じく明瞭ではない、と指摘する。続いて後半では「U」の内容構成を明らかにし、その在家解脱論に言及している。「U」によれば、在家実践道の最終目標は「出世間の幸福」にあって、それは声聞菩提 (savakab-

odhi)・独覺菩提 (paccekabodhi)・等正菩提 (sammāsambodhi)のいずれかを得て達成される。しかし前の二は在家者の世間的修行(福業)によって得られるが、後の一は得られないという。したがって「U」もパーリ上座部の教理を越えるものではなく、その出家主義の流れの中にあると著者は結論する。ただし「U」がこれまで原始経典やパーリ上座部の諸文献で明らかにされなかった在家者の修行法を具体的に示した点は大いに注目されるのであり、著者はその全体的構成を的確に捉え、本章最後にこれを図示し、読者の「U」理解の便に供している。因みに前掲目次(和訳篇)によって紹介すれば、第一章を「世間道の入門」とし、以下第二―四章を「正しい生活習慣の確立」、第五―六章を「宗教的实践」、第七章を「出世間道への「方便・準備」としており、第八章を「出世間道の「目標」とする。第九章は付録的なものであり、この枠組内に入らない。

第二章以下は、「U」で論じられる主要なテーマをそれに先行するパーリ語諸文献の所説と比較してパーリ上座部の思想史の中に引き戻すこと、更に俱舍論や順正理論の所説とも対比してそれをインド仏教の思想の中で考察することを目指している。その第二章は、在家者の信仰の証たる三帰依の検討である。北伝アビダルマが主として帰依の対象(所帰依)、すなわち仏法僧の三宝の本質を問題とするのに対し、「U」はむしろ帰依すること(能帰依)がその中心になっていると指摘される。「U」が所帰依に関して、とくに「法」について、これには本性(内容的)に四種(四聖道、四沙門果、涅槃、聖典)の意味があり、その

ら、六道の涅槃は nippariyāya (絶対的記述法 abhidhammika-desanā) によって、果と聖典は pariyāya (相対的記述法 sut-tantika-desanā) によって分類されるとする点、或いは「僧」を、北伝アビダルマのように聖者のみに限定せず、凡夫の僧も婦命されるべきものであるとし、伝統的な解釈に沿って、在家者のとるべき態度を明確にしている点は注意されよう。一方能婦依について、とくに婦依文、例えば婦依仏文を Buddhāṅgī-saraṇāṇi ti gacchāmi と同じように読むべきであるとし、この gacchāmi ㉞、信愛する (bhajāmi)、奉仕する (sevāmi)、尊敬する (payirupāsāmi)、或いは知る (jānāmi)、覚悟 (bujhāmi) などの意味を認めているところも ㉞ の特徴と言える。著者はこれを「仏は婦依処であるから私は「そこへ」行きます」というように解釈している。この箇所についてはすでに「パーリ仏教における三婦依について」(『仏教研究』第一〇号、国際仏教徒協会、昭和五六年)と題して論じられたところである。また ㉞ では婦依が世間と出世間の二種に分けられるが、これについて著者は前者の場合は信(三婦依)が智(出世間の幸福)に先行し、後者の場合は智が信に先行するとの結論を導く。

第三章では、前章の三婦依をうけて、戒が考察される。パーリ上座部では戒に正持(samadāna)と確持(upadhāraṇa)との二作用を認めているとし、戒体、常戒(五戒、十戒)、そして菩薩戒に言及する。次いで十三頭陀支のうちで一座食支と一鉢食支の二支のみが在家者にふさわしい行法であるとの記述に進み、最後に頭陀の仮実をめぐる大寺派と無畏山寺派との論争

に触れる。頭陀支が paṇṇatti であるとすると無畏山寺派の見解は本来的であるが、大寺派のそれも頭陀支(paṇṇatti)を実践する心理の場(parāmattha)に立って不善の頭陀支を否定しようとする限りにおいてその妥当性を持つ、と。この論証はすでに『印度学仏教学研究』(34)においてなされたものだが、ここには著者の鋭い洞察力が感じられる。

第四章では、㉞ が全面的に引用する『シンガラへの教え』に基づく在家者の生活規定の主要項目を検討している。とくにここでは悪業の四原因とされる貪、瞋、痴、怖畏のうち怖畏(bhaya)についての分析が詳細を極めている。その種類、はたらきなどを論じ、その本体を煩惱と心(心のはたらき)の中に見、「苦の脅迫感情」であると捉えている。

第五章は、十福業事の考察と若干の障礙法に関する付説である。十福業事は布施、戒、修習の三福業事にまとめられるが、そのうち戒はすでに第二章で扱われたため、ここでは布施と修習を主とする内容となっている。布施については、㉞ が在家者のための綱要書でありながら直接に布施を説くのは本章においてであり、このことは布施の位置が相対的に低下しているのではないかとの指摘がある。本章における布施、施与に関する論考はかつて『真宗学研究』に発表されたとくに興味深いものであり、功德の施与(pattidāna)、功德の随喜(pattānmodana)の概念が整理された点は評価されよう。ただし修習については「説法」の論考に問題があるように思われる。㉞ 自体も説法について十分な説明を与えていないため、依然としてこれが福

業事に含まれる積極的な理由を今一つ見出し難い。もちろんキリシタン居士とかウツガ居士の説法例はある。しかし従来言われていたように、説法は原則として出家者の務めであり、在家者は聞法にのみ関係したことであった。それがなぜ説法を福業事の一にしたのか。今ここではそれ以上問うことは避けよう。ただ著者の指摘の中に、「D」の説明を捉えて「説法の内容が仏陀の教えのみでないことが知られる。世間で有益な無罪の知識を説くことも説法であり、説法概念が拡大している」(二五四頁)とあるが、これは注意しなければならない。説法の中に果して仏陀の教えでないものがあるのかどうか。よしんば「D」の当該箇所をそのように拡大解釈するにしても、そこにはいわゆる浄法ないしその類似的思考がなくては充分でないからである。例えば「畜生論」(tiracchānakatthā)の中に国王や戦争の話が掲げられ、それらが無益徒勞の話とされているにも拘らず、なぜ『大史』(Mahāvamsa)のような書が比丘の手で著わされたか。これに答えるにはその各章末に加えられている一文を持ち出さねばならぬのである。

“sujānapasādasasahvegathāya Kate Mahāvamsa...”
(Mv.) (善人の信心と感動のためにつくられた『大史』…)
“iti abhinavasādhujanapāmojjāthāya Kate Uṇṣakajala-nānikare...” (Uj.) (以上、新入の善き人を喜ばすためにつくられた『在家信者の莊嚴』…)

つまり、国王とか戦争がいかに語られようと、章末にある目的に沿って仏陀の教えが、例えば無常等に関連して示されるな

らば、その話はすべて正当化されることになる。Ananta長老作の「C」の場合も、ほぼこれと同じ枠組で解釈されるであろう。或者手続きを踏まぬ限り、出家者が在家者に対して仏陀の教えでないものを説法することはないと言わざるをえない。第六章は「第九章の平易な解説である。尚また「第一部」の「序説」は「第二部」に相応しいもののように感じられる。

III

以上で本書「第一部」の紹介を終える。第「二部」は後で少し触れ、これより全体的な感想を述べておきたいと思う。

本書を初めて手にしたとき、実のところ私はそのタイトルに一種の戸惑いと新鮮さとを覚えた。それは薄々感じていたもの、まだ「在家仏教」がこのように正面きって仏教学の俎上に載せられようとは考えなかったからであり、また稀代の学僧河口慧海師による『在家仏教』(世界文庫刊行会、大正十五年)が咄嗟に私の脳裡をかすめたからでもある。河口師の場合、提唱、唱道というべきか、在家仏教を信念そのものから迸るような熱情をもって語るのである。その緒言に、世界に宣揚するに足る仏教は宗派的仏教とか阿弥陀、大日如来、妙法、観音の本尊仏教、或いは比丘出家的のものであってはならず、釈迦牟尼の仏教、ただウパーサカ仏教のみが現在及び将来の世界を浄化向上する力を持つとし、本文約三百頁を費して終始語調強く、その理由、意義を明かし、次のように結んでいる。

「最初より仏陀世尊が、ウパーサカ並にウパーシカの家内に、

比丘出家とは異なる実修法によって比丘出家と同一の真理を悟ることを教へられた。この実修法は至極簡單明瞭であつて、懺悔と帰依三宝と受持五戒とで成就する。成仏する為には、菩提心を発して菩提行を実修する。これがこの身を浄化向上し、次でこの国土を浄土にし、この世界を極楽世界にするに足る莊嚴行である。苟くも自己に仏性を有することを信ずる程の者は進んでこの莊嚴行を修めねばならぬ。」

やや長い引用（傍点は評者による）となつて恐縮だが、これから我々は河口師がいわば日本の「D」（在家者の莊嚴）を目指していたことに気づく。確かにここには師の深い学殖が窺われ、學術書の体も感ずるのではあるが、全体としてみれば、この書は明らかに啓蒙書の類と判断されよう。私には在家仏教と聞けばこの強烈な印象がいつも蘇り、その扱い難さを覚える。ただ寡聞にしてこの後に続くものを知らない。

世に多くのその名の啓蒙書があるのに、なぜ在家仏教の研究書が皆無に等しいのか。なぜその研究が困難であるのか。これを少し考える必要がある。卑見によれば、その理由は在家仏教における「聖典／説法の伝統」の欠如にある。別の言い方をすれば、出家者が能救済の立場にあるのに対し、在家者はつねに被救済の立場にあつて第二義にとどまるといふことである（山口瑞鳳博士「インド仏教における方便」、『東方』第三号、一九八七年）。たとえ菩薩、大乘などの名を用い、名を代えてみても、仏教の基本的立場からすればその関係枠組が変わることはない。在家者は「四衆」を構成しえても、「サンガ」に含

まれることはなかつた。在家仏教はどこまでも伝統の周縁にあつて、伝統の中心にはない。その意味において非伝統的であり、非権威的であると言わねばならない。この identity の捉え難さが、そのまま「在家仏教」なる名称に問題を孕み、定義を下し難くして、その研究を阻んで来たと思われる。

本書はかかる状況の中で現われた「在家仏教」の充分な研究成果である。もちろん「在家仏教」なる言葉の意味がここに論じ尽されているわけではない。むしろ殆んど触れられていないと言つた方がよい。しかし本書によつて伝統仏教の一資料を中心とする「在家仏教研究」の基が確立されたことは疑いえない。だから私にはタイトルが新鮮な響きを持つ。本題を「D」の研究と訳註——南伝の在家仏教論の資料——などとした方が「名が体に即」してよいとの意見（森祖道博士、「書評」、『東方』第三号）もあるが、尤もである。しかしどう感じるかは一に読む側の立場による。著者の「あとがき」からその研究動機を窺つてみよう。

「十二世紀と言う時代は法然や親鸞の時代と殆ど同時代である。……在家仏教開花の時代である。その同じ時代にインドに近い国々の在家の人々がいかなる思想いかなる教義のもとに宗教生活を送っていたのであろうか。この思いが筆者を『D』の研究に向かわしめたことであつた。……そこで論究される問題は「在家解脱論」に集約される。在家者は解脱出来るか。……筆者は知らず知らずのうちに浄土教発展の歴史に思いを馳せていた」

これによれば明らかにタイトルの「在家仏教」は、いわゆる日本の「在家仏教」を前提として考えられており、著者には「J」を一つの手掛りとして、南北アビダルマ、大乘仏教へ、やがては日本仏教へと在家仏教の研究を進めようとする意図のあることが汲みとられる。パールのみにとどまっていたはいない。

本書はまさに我国における本格的な「在家仏教研究」の到来を告げる鐘とも呼ぶうる。信仰、教理、文化——歴史から解放されうるところ——に響きわたるであろうと確信する。

以下に、本著作への敬意と感謝の気持ちをこめて私が気づいた異なる読みと理解とを(カッコ内に)示すことにし、またこれをもって「第二部」の評にも代えさせていただきたい。

〔目次〕第五章第六節、開法(開法)

〔第一部〕四頁一〇行、Rājaguru (Moratota Dhammarakkhandha) / 一七行、著作(著者) / 五頁八行、Mahāyākāthera (Śrī Siddhārtha Buddhārakṣita) / 十六世紀(十八世紀) / 一一行、JRIS (JRAS) / 一四行、Saddhammopānaya (Saddhammopāyana) / 七頁一二行、ウパーシカ(ウパーシカー) (以下本書全箇所これに同じ) / 一四頁一八行、言えども(雖も) / 一五頁一二行、visma (visama) / 二〇頁一三行、さまだげ(さまたげ) / 二二頁一七行、原始經典では在家者の(原始經典では出家者の) / 二五頁九行、sace (sace) / 一一行、balavati (balavati) / 二九頁九行、パーラーナン(パーラーナシー) / アンダローンダンニヤ(アンニャーコンダンニヤ) / 三五頁一四行、自性である(自性上である) / 四一頁二行、Threeford (Thre-

efold) / 四八頁四行、janāmi (janāmi) / 四九頁一四行、町(村) / 一八行、解釈している(解釈している) / 五一頁九行、anāvilakkhano (anāvilakkhaṇo) / padatthāmi (padatthānam) / 五二頁一行、Dhammasaṅgani (Dhammasaṅgani) / samsevanā (saṁsevanā) / sampāṅkatā (sampaṅkāṅkā) / 五五頁三行、知的は(知的な) / 五八頁一行、Paṭipattisaṅgaha (Paṭipattisaṅgaha) / 一二行、掃依の(掃依は) / 六二頁一〇行、良一(一良) / 六四頁一三行、倒他(投地) / 七五頁七行、不受蓋金銀戒(不受蓄金銀戒) / 七九頁七行、Asāhanāsa (Asāhanāsa) (ここに示された相当月は一ヵ月ずつプラスした方がよい。例えば「アーサーラ月」を「六月から七月」にする) / 八四頁一〇行、iharana- (iharana-) / sahanāṇ (sahanāṇ) / 八五頁一二行、他より施されたもの(乞食により得られたもの) / 九二頁三行、gīr (giri) / 一二行、Mahāvihāra (Mahāvihāra) / 一一頁一行、家の生活かられた(家の生活から汚れた) / 一二頁一二行、kiriya (kiriya) / 一二五頁八行、pattanuppādāna (pattānuppādāna) / 九行、かりに(かわりに) / 一三二頁四行、瑜伽地論(瑜伽師地論) / 一〇行、たてうか(たてあろうか) / 一三九頁二行、セイロン説法(セイロン説話) / 一四〇頁九行、曖昧は語(曖昧な語) / 一二行、bhaveti (Dhaveti) / 一四三頁一七行、Terunnāse (Terunnāse) (一四五頁九行も同じ) / 一四四頁二行、死んだ(死んだ) / 一四五頁一四行、dakkhina (dakkhina) / 一四六頁一行、ādisum (ādisuṇi) / 一六行、anumodinsu (anumodinsu) / 一四七頁一六行、倍化

(倍加)ノ二四九頁一四行、一八行 *pattanumodana* (*pattanumodana*) (一五二頁二行も同じ)ノ一五四頁九行、ドゥットガーマニー(ドゥッタガーマニー)ノ一七行 *parit* (*print*, *parita*)ノ一五八頁九行 *Abhidhammavatāra* (*Abhidhammāvatāra*)ノ一六一頁一〇行 *lakkana* (*lakkhana*)

〔第二部〕一六八頁原典資料略符号 *Abhidhammavatāra* (*Abhidhammāvatāra*)ノ¹*Diyavadana* (*Diyāvadana*)ノ²*Samyutta-* (*Samyutta-*)ノ³*Telakapāhagāthā* (*Telakapāhagāthā*)ノ一六九頁七行、九行、一一行、ウパーサカジャナランカール(ウパーサカーランカラナ)ノ一七〇頁二二一五五頁、それ故、『実にマハーナーマよ、在家信者は仏に帰依し、法に帰依し、僧に帰依している。実にマハーナーマよ、それだけで在家信者である』と言われていた。それ故、在家信者のすべての徳の中でも、あたかもすべての生物の保持者であるかのように、三宝こそが足場である(なぜならば『実に……僧に帰依するならば実にマハーナーマよ、それだけで在家信者となる』と言われていたからである。それ故、万物の中で大地が足場であるように、在家信者のすべての徳の中で三宝こそが足場である)ノ一七一頁一行、*経 sutta* である(経 *sutta* の本性が知られねばならない)ノ一六行、*パーラーナシ* (*パーラーナシ*)ノ一七三頁六行、福次的な(副次的な)ノ一七四頁八行、*アノーマ川* (*アノーマー川*)ノ一七五頁一三一一四行、*跏趺*からわずかに……*通達した*』と言ひ、*四無数*……*体得した場所*である*跏趺*と*菩提樹*とを(跏趺の座からわずかに……*通達した*)ということ、*四無数*……*体*

得した場所ということ、*跏趺の座*と*菩提樹*とを、一五行、*跏趺* (*跏趺の座*)、*宝の経行*を(宝の経行所で)、一七行、*ラタナ・ガナ* (*ラタナ・ガラ*)、一八行、*普ねぎ*と*発趣*とを(普ねぎ発趣を)、*ラタナ・ガナ* (*ラタナ・ガラ*)ノ一七六頁一八行、*マ* *ガダ薬* (*アガダ薬*)ノ一七七頁七行、*緑豆* (*緑豆*)ノ一七八頁一一行、*悟ったこと*は(悟った振りをして)、二二行 *M. I. 169; Vin. I. 7 (J. I. 14)*ノ一七九頁三行、(*ミガダーヤ*)ノ五人(*ミガダーヤ*)の五人、四行、*アンニャコンダンニャ* (*アンニャコンダンニャ*)、一八行、*善行者*である(比丘らよ、善行者である)ノ一八〇頁二行、〔五二〇〕〔五七七〕ノ一八一頁一八行 *yamakapathariya* (*yamakapathariya*)ノ一八二頁六行、*愚昧* (*愚昧*)ノ一八三頁一行、*本体の上*では(内容の上では)ノ一八四頁九行、*両方*には(両方には(137))、一二行 *sa-nhata* (*sanhata*)ノ一四行 *ghatita* (*ghatita*)ノ一八六頁一六一七行 *pariyup* (*pariyup*)ノ一八七頁四行 *ajam* (*ajam*)ノ一六行、*近づ者* (*近づ者*)ノ一七行、*帰依* *処行*した(*帰依* *へ行*した)ノ一九三頁六行 *nānavipayuttacitta* (*nānavipayuttacitta*)ノ一九四頁二行、三行、四行、*ブラフマアーユ* (*ブラフマアーユ*)ノ一〇行、*であり*す(であります)、一三行、*して* *下さい*」このように(して下さい)と、このように)ノ一九六頁一〇行 *vickicca* (*vickicca*)ノ一九九頁八行、*語* (*話*)ノ二〇一頁一行 *vipassana* (*vipassana*)ノ二〇四頁一行、*アッガ* (*アッガ*)、一〇行 *アッギ* *ダッタ* *婆羅門* *大士*が不正の路に(人々を)入らしめて(アッギ *ダッタ* *婆羅門*が不正の路に大衆を入ら

しめつ) / 二〇七頁一六行、ヴァーバーラ (ヴェーバーラ) / 二〇八頁一六行、如意法 (如意宝) / 二二四頁一三行、それらの (その私の)、一五行、一緒に馬に (一緒に千頭の馬に) / 二二八頁一七行、私のためにそれらの威神力により (その私の威神力により) / 二一九頁一四行、五体倒地 (五体投地) / 二二〇頁二行、百ヨージャナ (二千ヨージャナ) / 二二七頁一行 *vanāgamo* (*vanāgamo*) / 二二八頁一六行 *paṇātipāta* (*paṇātipāta*) / 二二七頁五行、それによって (それらによって) / 二二五頁一行 *samyutta* (*samyutta*) / 二二九頁七行、すぐに (正午迄に)、八行、すこのの間 (一日間) (二二頁註①も同じ) / 二四〇頁一三行 *raṭa* (*raṭa*) / 二四三頁八行、両縁り (両縁飾り) / 二四八頁九行、雨期の三ヵ月 (雨期中の三ヵ月) / 二五〇頁一八行、第七の学処を誦りなどと華鬘などに分けて (第七の学処を誦りなどの離と華鬘などの離とによって) / 二五一頁一行、高床・大床を (高床の学処を) / 二五七頁五―六行、破た (破った) / 二五九頁六行、ヴィドゥッ王本生 (ヴィドゥッラ本生)、一八行、ヴァラナシー (バーラーナシー) / 二六一頁二行、汚れている (汚れている) / 二七六頁一八行、ヴェーダーハ王国 (ヴェーデーハ王国) / 二八二頁一七行、とめるが (とあるが) / 二八三頁一八行、飲んで (飲んで) / 二八四頁三行、それら彼らの (それは彼らの)、五行、葉の葉先きほど (クサ草の葉先きほど) / 二八五頁一二行、ここまでに (ここまでに) / 二九三頁一五行、立って (立った) / 二九四頁九―一〇行、サッダティッサ王 (サッダーティッサ王) / 二九五

頁一六行 *samyutta* (*samyutta*) / 二九六頁一行、有希な (希有な)、二九七頁一五行、大地獄 (大地獄に) / 三〇二頁一八行、大きな林 (大きな床) / 三〇六頁一―二行、月末には大長者様は乳飲み児にも子供達にも口を洗わして、口に蜜を四つ入れてやって布薩者にするんだ (大長者様は、たとえ乳飲み児でも子供達でも口を洗わして、口に蜜団を四つ入れてやって布薩者にするんだ) / 三一二頁一四行、取ることができない (取ることができない) / 三二六頁七行、ウパサーカ (ウパーサーカ) / 三一九頁一六行 *kiṭṭanti* (*kiṭṭanti*) / 三二二頁八行、スラー・メーラマ (スラー・メーラヤ) / 三二六頁七行 *vinā* (*vinā*)、八行、ラーマヌジャナ (ラーマーヤナ) / 三三一頁一〇行、これている (こわれている) / 三三三頁二行、親切 (親切) / 三三九頁四行、このように実践している者は、これらの方位を覆護した者と名づけられる (このように実践するならば、これらの方位は覆護されたものと名づけられる) / 三四三頁二行、立つ場所 (立った場所)、三行、ようにせず (ようにせず) / 三四八頁一五行、供住 (共住) / 三四四頁四行 *bhāveti* (*bhāveti*) / 三四九頁一―二行、カンボジャ (カンボージュ) / 三七〇頁九行、清浄な手 (濡れた手) / 三七三頁九行、三日進む (三十三天に進む) / 三七五頁一六行、鉄山山において (転輪王として) / 三七六頁一五行、転生することは (転生することに) / 三七八頁一二行、(何も) 与えず (何も与えず) / 三九二頁一六行、音を出がでるように (音がでるように) / 三九三頁二行、布薩者なり (布薩者となり)、三行、五行、大士 (大衆)、一五一―

六行、「広大な山」という名前のそれがやって来る。王の高幢の上に置くと、四つの原因が重なった暗黒の中でも一ヨージヤナ先きまで輝く(ウエープッラ山からそれがやって来る。それは四つの原因が重った暗黒の中でも王の旗先に届き、一ヨージヤナを輝かせる)／三九六頁七行、ゴンバ(ビンバ)、九行、すばらしマニの(すばらしいマニの)／三九九頁四行、「布薩者」とは布薩が言われた。「即ち」半日の間、在家者が守るべき八支をそなえた戒があり(「布薩者」とは、諸半月(満月、新月の)日に在家者の守るべき八支をそなえた戒が布薩と言われ)／四

〇二頁一〇行、テーティンサ(テッティンサ)／四〇三頁一六行、ウエージャナンダ(ヴェージャヤンタ)／四〇四頁一二行、瘤をつく(瘤をつくる)一ガーヴァタ(一ガーヴァタ)、一八行、七つづ(七つづ)／四〇七頁九行、マニニャーギンダ(マニニャーギンダ)／四一六頁二行、五それ故(それ故)／四一七頁三行 vijahati (na vijahanti)／四二〇頁四行、第件(条件)／四三六頁四行、ウパーサカジャナーカーラ(ウパーサカジャナーランカーラ)